無駄之図会

五

1947

いかづちよりはひんぬしの面
さかげたるの家紀の孫ごとの
名人ことごとく家かの人名紀信也
いしとこれ

へ 13
門帰巻

無飽三文圖會巻第二目録

天象之部

雲　闇雲　白雲
霧　晝仕雲　宵仕雲　宿仕雲
雨　天泣
風　大盡風　手代風　馬耳風
月風
雷　雷獣　雷爪
霞　朝霞　夕霞　朦霞
霓
白雨　朝立　盆立
嵐　野嵐
山風　頭風　御下
稲妻

露
雪
霰
自前雪
他所雪
見忘

霜
初登
成雪
肩雪
山雪
舟雪
氷

春情指南車　全五冊　近刻

諧誠新書　全三卷　右同断

○雲。白居易が詩に曰。走雲鳥の糞に似く。人のたきまに
かゝる。新米のちよぼくん。油揚のごき著とのを著く身仕
舞所の畫とんび手だんもの山昆布鏡臺のさつま芋いつ
の間に中〻數が減る。是〻の輩を紙〻たる詩也。されば住
吉の御神の歌にも
汗とくる木綿ぬのこの苔ごろも。結きぬおやは細帶もな
くなる。又一說に。こける時著る夜いきもれくて。内〻結きぶ
どで〻著るなり。是こそ其身よいる時の態なり。風呂が婿
めぐ山の腰よりのぞくけ〻。額の不二の真

白に見るは素より肌の雪なれば。炭をも雪と欺く。這白
粉の雲なるべし。都て之をみるに首のたさり紅ぶめきて
真白なれどきものは苔衣を著さり猶小便掃児に花を
生たるが如し。就是雲は陰陽の二氣むし〻く生ずる所也
風呂の湯氣にむされ〻後茶色なる顔も真白に見なる。
と白粉のこゞつけ。雲つゝむやうなれば這般不滑稽をいふ成へし
○霞。和訓やけ也又朝夕雲の赤く照を朝やけ夕やけと
いふ此やけは同じ〻ことなれ。慄やけといふ闇雲変じて慄霞
となる也。闇雲和訓ぐんく其色をゞめい真昔になりて

絶々と見ゆる。夫より朦霞と成る。ぢ〜輝くと華美に見ゆる。這雲起る時は其色真黒になつくをこる。一すじ前もみくさなり。又無闇ともいふ故に むやみといふなり。梅の花。剣の稲妻をきらめら〜。又の永なんど降と云なり。是を闇雲のやらみつちやと云なりとて後悔さるなたぐ。雲霞と迯る的なり。故に闇雲と霞とは原無分別の一つなり〜〜。二つに云ふぐ。俗に霞を春のものとなーたるは。靄の字の意なり〜。紅霞の意なり云ふぐ。這般の文は圓機活法ぐ詩をあぐる輩は先刻承知なり

○霧は昼さつを昼仕雲。霄は夕たつを霄志きり。更くたつを店仕雲也。此世界をべく雲中の人家或曰雲と清く讀は誤なり。義理と濁く讀べし。此國別に人間不通用の義理立引なり。不斷勝〜とさる故に雲を俗をやとの ふ此雲の中に入をとのは即雲中の人也。却て此義理を病むものは親兄弟の義理を忘れ當座雲に終身の義理を暗まさは是雲中になれば なるべし〜

○霓。南花經に所謂。貌姑射の神女はのふぐ。昔阿古屋氏曰。勤とふ字に二字はないと昔のとなり。今は慾の字を

添〻二字となり〻。女ごろの一生ゞも今ハお足ぎ[illegible]。
九十六位いきつと行と見る。故ゑ幾分助ともなく二字の立
を行り。窺天鏡を以て這二字を見るゑ。餘所目ゑ看る
とい甚遠ひ也。勤の一字ハ馴たなつく。苦ゑなる所ら色こ
も見へゞ。名の〻空ゑ立なるべし。唯其色赤く。花麗ゑと
ゐるハ。慾火の輝り。心ハ水浅黄の浅く〻〻。原の志ふ地ゞ
ゑ〻ゞやをのと流石ハ拍酸ゑ萠黄の色もゑゞれり。夫
さく〻客の前後ゑ影日南の色を行ふゞ。黄なるハ黄金
のあ〻き也。故人句行りうに以て証となゞ。恋思案外慾

算用中。嗚呼悲夫この二字の立る。原へとのへゞ持丸長者の
金持革。道具ぜゞゑの堀だ〻自慢僅なことを算用だらく。
智恵の行る積りと見ゐる何を取違ふ間違ふ三八四九の
人中ゞ高の志れふる志ふん坊だな〻。馬鹿を自身ゑふれ
行ゑく。尾の〻めゝる。ゑ文志ふゞ。此様不順な氣候ゑ連て。
烟花世界の人心寒暖故さゞゑゞ二字と不義理がいやゑ
〻て。漸ゑ氣候のまるく なるハ一概ゑ烟花世界の氣候ゑ
行ゞ。是大盡國の氣候不順かへつく。這世界ゑふたる
べ〻。彼天津橋上ゑ。杜鵑をきく毛唐人の歎息をこれ

却て此二字を見て。是に倣ふ変なり

○雨。雨和訓あめ。天和訓あめ。俱に同あめなり。曰て空言を

いふを俗にあめといふ。雨飴通ぜれば也。夫天に雲あらして

雨ふる。是を天泣といふ。と書帝にも出て。真剣の

三戈圖會にも載せ。変しく作者の撩天的話に所前

篇既に空泣の雨を挙るといへども這天泣の考據をいぶ

さぶ。曰て再復て載せ天泣は唐でも天泣也天にくも

なりして雨ふるは行心にあらして泣ごと。搜神記に雷公

に代つて雨を行法を載せ。又此雨や小雨と泣法は心ぐ

ひよつと想て居る客と這般るがなつてあるべ悲しかろう

とて又ケ様まれをしたて嘸かなしかろうと。始終男の

顔を見ぐつと其情をうつし。又色〳〵外の哀しう

ことを思ひだし。耳に愁場の淨瑠璃をきく氣ぐ情を

移せば涙はひとり出るもの也とふ故に詞につく情濃なり

曰て這雨にいふ者儘に三度笠にちよかづき。毎むん

通ふとなり又一種くやし泣の雨なり。勤なれべこそ癪蝦蟆

の無理をもきくと。受て居れべなるづ無とう胸くるを

しき癇癪涙なるべは百姓とりちぐ已が田地に水をひき。

吾畑のとく思ひ稲の穂の想れられさ氣ぐ無上よ悦び豊年の瑞とあを者ハ取くもつゝ間遠なり故よ天泣ハよゞめの方ぐも不祥の雨とあを

○白雨　朝立ハ客人國よ多〳〵自〳〵ちるべし。盈立一名盈津ひる森の西めよ雲となり雨となる。故よ盈立立ハ立なり。盈津ハひるハつゝひといふ妓家者流の略語よしてせんほせ夕立ハ何ゆう立とこゞつけて白雨の空のぐく。尻のゝ真赤まんげる嘘のとてなゝ也変して惣嫁のとるハ何〳〵彼店もの〳〵出番のちょんの間又ハ門限の六ッ時限り。雲倏ち起り

雨頻りよそぐ。雲雨の情せまし。なく。是も苦界とみにくの。
泣くくもさるおべつも。晴くい本んの嘘つくやうよ夕立ぞらよ
異るぶ夫山の端の月舌を出さがどく。小笹の風ハ笑ふ似
たり。月の光のちらくしく。夕立雲のむげやもく。得くい
後のふたげるるひり。回るく故秋よ
息がたべ。濡ざるまり。残旅人のひとより晴る野路の村雨
是それを詠ー寄なり。性急の急葉雲雨の情おべつ
の涙の雨ハ袖めぶれ。又逢瀬の一言よいぶぬ日掛の損を
もる。是いそぎ葉のひやまりも也。嗚呼太田道灌よくよんざ

物ならぶ哉

○風大概野父世界ハ吹風ハ真の風鮮ー。まづうべを吹く。
せんどのふ風ぶ引くいでムり外れど郎君じやと聞く。今そ
こへ行とふく来まくとまづ吹のがして。夫より此風をし
るれを吹をとー。墨紅を吹きかんざーうくがいを吹く取
く仕まふくをき。鬢をさらと流ながー。俄ハ風と吹るる世。
今まぶくハ何所ハ居さう此風ハにのハ人ぶくくして慌ひ已ハ
をられく負つきのーきを。風と思ひく。深切なるも人目お
らーく。故ハ這風氣の毒とるく。心甚さむー。此風ハ

吹上されて。己恍が出る時は。人は髪の根のさまる位よ思ひて
おつとせる也都て這世界の風皆真の風をく[な]親方よ
當つて吹風は置屋の二階よのぶ〳〵。好き客の来る時は。
俄に吹かまりて思ひもよらるめり。又夜ひらの其翌風や
持病の小息子世界異見は却て馬耳風の空吹風ときくな
るへし。大盡風。近来這風いとつて寒し。風伯のとりちゞ
と見るると多し。夫君子の徳は風なり。小人の徳は草なり。
かく有べきたづよし。前篇のごくなるべきよ君子の風と
へ些とも看へ。草風よりは偃ところ。秋風の秋れなり。

却て〻のつけよ反るとにのり暴破ちて〻野分のほとの見うけ
を倒し〻吹を多し。是を以て〻の故よ花柳世界の花をち
らし。却て〻馬席を散賊よ黄葉の大様なふで薄紅葉の
黄金を散を回て〻當世手代風をよし〻吾物のふぶの
吹次第て〻宿下りの吹をろされ更よ赤おんの風よて
よよは身のう〻茶屋は此風よりの〻られ吾身は風の吹べ飛
風るうふ〻は數〻の悔言も今更よ。チテチの小夜
山嵐後悔先よたゞ侍べし

○山風。俗よ喰嵐。又駄鳥とらぐかいしきの松は根あぐ〻

倒れ硯蓋の山守をしめ〻影をかくして料理番膳をつぶし。濱焼の鯛目玉を吹とばされ残物の更よ残るきふるまひ此喰嵐八山海野者を吹とろく。地を払ふ〻鳥有とあるを。跡ぐ大よ原を損ふ故よ野ばらしとゆふ都て野分のはしのどく。浅るよ見る物なりし。跡ぐかるふべ月風の吹ことなり

。月風。多く〻蜀呉の國よふく也百済国より来る風いたるさぐ悪臭し。這風よりふ人ハ嘔吐を催ものとゆふ

。山風。又頭をろし俗よ山ぢでることゆひ又おさぐりとゆふ

這二ツを合して山風と牽強る也。又例の山よ村雲〻むらくと起りまづ村ぎもの膽を潰させてつぺんくとお下りの頭風に出ばつくい恋の悔よ身を浮舩の娼妓も楫とりの移く持ばまし〻流れよ熟し〻水商賣なんぐも乗きる男藝者も磁石の針の方角を失ひ尻よ帆をうけく逃のぐ照くもりさ〻定まらぬ氣遠ひ日和よ出ばあくん娼いおさぐまアの舟賃ぐ。ひんづよ骨を折なるべ〻

。雷。月令よ九月雷鳴ろく諸の虫蟄る此雷色変の虫を驚き仲居の酌とり虫新米のちぼぼん一すの虫ま

立アの魂きもを潰しくだんまりよ蟄る而も此雷九月十月の頻著せた時くよ鳴声内中よ裏くなり。但し腎を揉ぶ好んぐ人の耳をこを唐王充が論衡ょ雷公の形を圖きるもの八是と異なり此雷ぎせる火だ〜さい払ひ下ろり次第よ手よとつく太鼓をたゝぶ人の頭を敲く。尤安置屋の世界よ多〜。又此雷のある桑く。悦びくるふく悪太鼓をうち平生のむ弥きを暗き蓄生下り。形小猫よ似ゝり。常八亭主の頷の下を住家なし。又鼠人のふところく這入る即是搜神記よ所謂雷獸

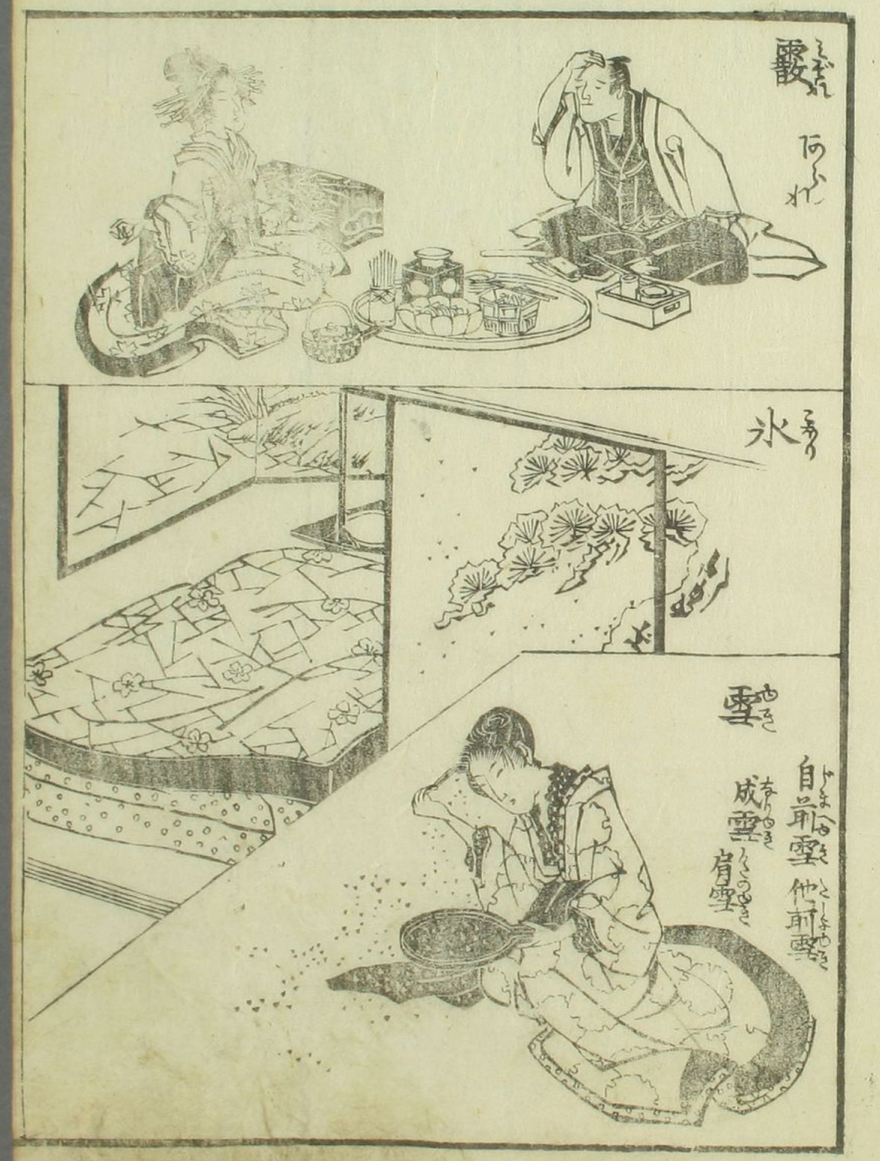
なるもの耶。○雷凡この凡よふるく者ハ兄弟骨肉をつんざゝれ。臭の痛となること甚し

○稲妻。いなづまこゝに皆妻也苦界十年うゝその空一刑定め
ぬ皆妻や。宵い東〳〵又西よ影もたゝるさ誓言の皆人
ごとよ未ろくる起請誓言紙ハ正よ是蠟の玉子とぢを見
如く。ひのちゝでも一刑よなるといひ此方ごも一刑よなると
ふ同〳〵人ハ皆吾妻の心たの〳〵媚妓の身を鶏印と
ぢゝふ世孫が爾ハいゝ是を以〳〵の故よ皆妻のこゝ〳〵つけ。
サケ〳〵つとでも言〳〵見よ

○霜。和訓おのぼり。正月三日の中よ降雨をおさゞりとこゝて
豊年の志るし〳〵となひ。変〳〵作者の作語よひゝ。狂言
詞の海を見〳〵る者ハ知ん即ち霜と雨とおさゞりとおの
ゝりと似よりの変なるを以〳〵の故よ。〳〵這辛強をな
きなり。霜ハ露のなるとゝろ即ち此霜草ぶゝく。つも
けき所より来〳〵四時絶間なく。花柳世界をぬゝ
ゝ但〳〵初霜といひ。初登りとふ同〳〵亦狂言をも
つ〳〵こゝ〳〵つけ。
露結ぶゝれ〳〵も霜の初のぼり。言の葉草の鉛色なる

眼よ看へめ散戝よ。水金の色をたらつゝ。露のあさけのたのりしなべあゞで。鼻の先ふく恋風よ形へ露の何取ふ丸く轉び安し。已ゞ歯の黄ばみたるより。能か稼つけの無を涼く。秋のにしきを輝う。酔ちどろへ露わゞもなきへ。却つく白露の白銀と霜よそむ黄色な物の澤なれば千入の紅葉一入よ。そこく世界も多くなべし。亦霜ざ夜の霜よいくつてへ其まゝひ日南臭といふ。雪へ作者ゞつよ西ゞ詰りゝ自前雪へ積りて節季とけぬ物をもひ。肩の雪へ四寸五ア人の肱まぐ積るを限

となに人目よ寒き酔ゞり國腕出しゝ氣が利く有ゝら。羅生門の鬼へ痛目へ爲まん。他前雪へ全盛ぬるゝ方どやく東ゝるなるべし。高ゝ前へ積雪の船雪。山雪。盆屋雪。ゝの庭の雪なふで。得ゝへ全盛をゝゝりを能せゞ思ひしをへ淡雪の兼ゝくの積り思ひきや日のさしゝゝつゝる雪遅磨さとれば人も一尺り。若界も果べいつまぐぐ二十と五ゝ六の花花の姿も散やもく。雪の仏よ似ゝるべし。仏たのんゞ地ゝくへ堕る叶ゝ時の神たゝく全盛のあり雪ゝつゝれむべし彼何某の女将のゝりつけられしゝ雪の夜も因果觀面小野の



御息女かしらの雪よみつ輪くむ。乞食とまくらの成雪々。
是全盛の報なるべし。世間の全盛つゝ給へ雪ぞりの
雪しぶい雪と花とよ戯むる。身は是終よ借銭のそろく
ど積る雪なれど消るを思ひをさる時は何をいふくも
徒よ塩抑絮の戈も聞よ何まぶ智恵は其身の敵となる。
昔のきぬぐ引くく。木綿の綿の雪の色暮しん
即ちこれ是なり雪の雪ころ〳〵。たくゝい却つ〳〵あるもの。
嗚呼さとるべし雪達磨
。霰は散は見それなり。濁る〳〵讀は誤也見それよ〳〵實は見

忘れ也造世界へ玉霰の玉さうよ。軒の板屋の音づれ人
得〻このうれよひふ。客の方うぶ名ざしの唱妓をりひの
外よ見それよひひ。面目灰よまぶそ

神無月何をきるるの玉の客ほ〻定なくみそれぞち也

商賣よきるまぶ〻あくれもない霰なるうきる石童丸い何
られのこぶつけ。村時雨ざつと如斯

。氷ハ水結ぶなる雪の類なり雪を六ツの花とのふ故六
の花を八ツよつけ。八ツの花を十一よつける氷ハ高利なり。
客ハ是よ氷〻〻〻其茶屋ちゆふぶ却〻日向のこ庭

りのごく。何時の間まゆ〻消〻仕まふ故よ氷門をいでぶ
悪吏千里を走ると。悪い評判のまるるを云なり古語
曰。氷よこりよ道齊坊。嗚呼まゝ悪い氷つけなり
昔王祥こりよ卧〻鯉をとる全躰まるい思ひつき風
ひきそうな仕吏なり。今時百出せぶ指身よ〻てまぶ
酸味噌ば好〻ぶい。氷まふ〻〻泣よ及ぶぶ。こんな無分
別な孝行の爲人へなれど此世界よ一種の氷ハなり。女郎
出たゝめをつゝ〻日〻おまたんよ早〻逢ふとおりふく。定
客まちめをう成ま〻。可愛をうなと思ふ〻。ハゝ〻めて

おくれなされト乞食が火燵のかたハりに犬だかへて寝る氣で。情もなにもなく。温ぐつよべくぐつと刎込れ客ハのろけ切て。ウーレ氷のやうな何に孝行な人が。涎たらしく這氷に寝るなり。作者の曰。氷ハ水に属しく。天象の部に入べき物なれど。雖然。雪が氷かこれみやしゆんせと新内節の典故にもとづき就雪の條にをく。亦是作者博識を著ハ也。

魚鮑三戝圖會二之巻終